

恥辱のヒーロー

第一章はじめての快楽

けたたましい警報が街中に鳴り響く。突如として現れた地底帝国の巨大なドリルが、アスファルトを突き破り、高層ビルをなぎ倒していく。人々が逃げ惑う中、浅葱優は唇を噛みしめていた。彼の父であり、天才科学者である浅葱博士が、地底帝国の怪人たちに連れ去られてしまったのだ。

「父さん……！」

優の脳裏に、行方不明の父が残した言葉が蘇る。『このスーツはまだ完璧じゃない。だが、お前なら』。父が開発した最新鋭のパワースーツ。それは、装着者の潜在能力を極限まで引き出す代わりに、脳に直接作用し、闘争本能と性的興奮を強制的にリンクさせてしまうという、恐ろしい欠陥を抱えていた。

「俺がやるしかない……！」

優は決意を固め、地下の研究室へと走った。銀色に輝く流線形のパワースーツが、静かに彼を待っていた。装着すると、身体の奥から凄まじいエネルギーが湧き上がってくるのを感じる。同時に、股間がじわりと熱を帯び始めた。

「くっ…！」

込み上げてくる羞恥心を振り払い、優は戦場へと飛び出した。テレビ局のヘリが上空を旋回し、彼の姿を全国に生中継している。地底帝国の先兵である触手怪人たちが、ぬらぬらと粘液を滴らせながら優に迫ってきた。

「うわあああ！」

優は雄叫びを上げ、触手怪人の一体に殴りかかった。スーツのパワーは絶大で、怪人の身体がくの字に折れ曲がる。だが、その瞬間、優の脳を稲妻のような快感が貫いた。

「ああっ…！」

思わず漏れた甘い声に、優は顔を赤らめる。戦えば戦うほど、身体が敏感になっていく。スーツの欠陥が、容赦なく彼を蝕んでいくのだ。

「ハア…ハア…」

息を切らしながらも、優は次々と怪人たちをなぎ倒していく。しかし、その動きは徐々に精彩を欠き、腰つきが微かに震え始めていた。その隙を、残忍な怪人が見逃すはずもなかった。

「ぐあっ！」

背後から伸びてきた触手に足を払われ、優はバランスを崩して転倒する。スーツの一部が破損し、ヘルメットが外れて素顔が露わになった。汗に濡れた黒髪が額に張り付き、潤んだ瞳が恐怖と興奮に揺れている。そのあまりにも美しい貌が、テレビ画面に大寫しになった。

怪人たちが、下卑た笑みを浮かべて優を取り囲む。一人の戦闘員が、彼の胸に手を伸ばし、スーツの隙間から乳首を弄り始めた。

「ひゃあっ！？や、やめ……！」

電流が走ったような快感に、優の身体がビクンと跳ねる。戦闘員たちは面白がり、さらに執拗に彼の乳首を嬲り、アナルへと指を伸ばしていく。

「あ……あああッ！」

未知の感覚に、優の理性が焼き切れる。彼の美貌は快樂に歪み、喘ぎ声がマイクを通して全国に響き渡った。そして、ついに抗うことをやめた身体が大きく痙攣し、透明な液体を噴き上げた。

「あああああああッ……！」

潮吹き絶頂という屈辱的な敗北。薄れゆく意識の中、優は怪人たちが満足げに引き上げていくのを見ていた。これが、地獄の始まりに過ぎないことを、彼はまだ知らなかった。

屈辱的な敗北から数時間。優は満身創痍の身体を引きずり、
かろうじて地下の研究室にたどり着いた。破損したスーツを
脱ぎ捨てると、全身に刻まれた快感の記憶が蘇り、思わず膝
から崩れ落ちる。

「うっ…く…！」

鏡に映った自分の姿は、頬を上気させ、瞳は潤み、どこか蕩
けたような表情をしていた。あの絶頂が、身体だけでなく心
まで変えてしまったかのようだ。優はシャワーを浴び、無理
やり身体を清めたが、一度知ってしまった感覚を洗い流すこ
とはできなかった。

その頃、暗く湿った地底帝国の中心部では、おぞましい光景
が繰り広げられていた。拘束された浅葱博士の頭に、奇怪な

装置が取り付けられ、彼の記憶が強制的に吸い出されていたのだ。

「うぐ…ああ…」

博士の悲鳴が、薄暗い玉座の間に響き渡る。地底帝国の頂点に君臨する地底王は、その記憶から抽出された情報を、満足げに眺めていた。スクリーンに映し出されているのは、他ならぬ優のパーソナルデータだった。

「ほう…浅葱優。美しい顔をしているではないか」

地底王は、優の戦闘データと、テレビ中継で晒された快楽に悶える姿を繰り返し再生させ、歪んだ笑みを浮かべた。特に、潮吹き絶頂する場面では、喉を鳴らして喜んでいる。

「このスーツ、面白い欠陥品よ。だが、完璧ではないからこそ、利用価値がある」

地底王は、側近である触手怪人の長を呼び寄せた。その怪人は、先の戦いで優を辱めた個体よりも、さらに巨大で、おぞましいイボに覆われた触手を持っていた。

「よいか。次なる侵攻では、あの小僧を捕らえよ。スーツには強制解除コードが存在する。これを使い、奴を無力化するのだ」

地底王は怪人に、スーツの弱点と解除方法を記したデータを転送する。そして、ねっとりとした声で命令を下した。

「命令は『開発』だ。そのイボのついた触手で、あの小僧の全身を隅々まで味わい尽くせ。あの美しい身体が、快感だけで動くように、徹底的に調教するのだ。ただし、殺してはならん。最高の玩具として、余がじきじきに味わってやるゆえな」

「御意……」

触手怪人は、おぞましい触手を蠢かせ、深々と頭を下げた。その単眼の奥に、残忍な愉悦の色が浮かんでいた。優を待ち受ける、さらなる絶望と快楽の地獄。その幕が、今まさに上がろうとしていた。

数日後、地底帝国の再度の襲来を告げる警報が鳴り響いた。優は恐怖と屈辱に震えながらも、再びパワースーツを装着し、戦場へと向かう。この街を守るため。しかし、優の心の奥底では、あの抗いがたい快感が再び訪れることへの、倒錯した期待と不安が渦巻いていた。

今回の敵は、一体だけだった。だが、その姿を見た瞬間、優は息を呑んだ。以前の個体よりも遥かに巨大で、おぞましいイボに覆われた無数の触手を持つ、触手怪人だった。

「一体だけ…？馬鹿にしているのか…！」

罨だとわかっていながらも、優は突撃するしかなかった。テレビ中継のカメラが、またしても彼の戦いを捉えている。だが、優が攻撃を仕掛けようとした瞬間、怪人の触手の一本が、彼のスーツの胸部にある制御パネルに触れた。

『強制解除コード、入力されました』

無機質な音声と共に、スーツの拘束が解かれ、エネルギーが急速に失われていく。スーツはただの重い枷と化し、優はその場に膝をついた。

「なっ…どうして…！？」

「ククク…地底王様より賜りし情報よ」

怪物は下卑た声で笑い、抵抗する術を失った優の身体を、粘液質の触手で絡め取った。スーツの胸部装甲がこじ開けられ、白い肌が露わになる。

「ひっ…！」

イボに覆われた触手の先端が、優の左の乳首をゆっくりと撫でた。ぞわりとした悪寒と、それに逆らうような甘い痺れが、背筋を駆け上る。

「んう…っ！」

「ほう…ここはもう感じやすくなっているようだ」

怪物は愉悅に声を震わせ、イボで乳首の先端をこすり始めた。最初はゆっくりと、そして徐々に速度を上げていく。

「あ…あっ…ん、んう…！」

優の口から、必死に堪えていた喘ぎ声が漏れ始める。乳首という、今まで感じたことのない場所から生まれる快感に、優の思考は麻痺していく。イボの凹凸が、敏感な突起を的確に刺激し、脳の芯を蕩かすような快感を送り込んでくる。

「や…やめ…ふ、う…あ、ああッ！」

怪物はさらに、もう一本の触手で右の乳首も弄り始めた。左右から同時に与えられる、ねっとりとした刺激。イボが乳輪を擦り、先端を弾き、時には強く吸い付くような動きを見せる。

「ひゃうッ！あ、あ、ああっ！んく…ううう！」

優の身体がビクンビクンと痙攣する。快感の波が、乳首から全身へと広がっていく。腰が勝手に動き、何かを求めるように揺れ始めた。その淫らな姿は、全国に生中継されている。

「もつと…もつと啼け。その美しい顔を、快楽でぐちゃぐちゃにしてやろう」

